

学位論文審査結果の要旨

博士課程 甲	第 号	氏 名	横江 琢示
審 査 委 員	主 査 氏 名	星田 嘉紀	
	副 査 氏 名	東 美菜子	
	副 査 氏 名	佐藤 裕之	
<p>[論文題名]</p> <p>Comparison of symptomatic spondylolysis in young soccer and baseball players. 症候性腰椎分離症を有する若年サッカー選手と野球選手の比較 Journal of Orthopaedic Surgery and Research, 15(1):378, DOI: 10.1186/s13018-020-01910-4.</p> <p>[要 旨]</p> <p>【背景】腰痛は若年アスリートに非常に頻度が高い症候群の一つであり、腰椎分離症はその主な原因の一つであり、サッカー、レスリング、野球、新体操などのスポーツ競技者に腰椎分離症の頻度が高いとされる。本研究の目的は若年サッカー選手と若年野球選手の症候性腰椎分離症患者において、臨床的特徴および画像所見を比較しスポーツ種類の違いがどの程度腰椎分離症発症に関与しているかを調査することとした。【対象と方法】2017年から2020年において腰痛の精査目的にMRIを施行した7歳～18歳の若年アスリートの診療記録を後ろ向きに調査し、最終的に症候性腰椎分離症と診断された133例を対象としたMRI画像の特徴を分析した。【結果】計133名の若年アスリートが症候性腰椎分離症と診断された。うち33名のサッカー選手、49名が野球選手であり本研究の対象とした。全選手とも男性であり、平均年齢はサッカー選手15.4±1.4歳、野球選手15.4±1.6歳であった。MRI所見に関しては、病変の局在は両群とも第5腰椎に最多(57.8%)であり、第4腰椎(31.9%)、第3腰椎(10.3%)が続いた。サッカー選手は野球選手と比較し病変数が有意に多く、両側病変も有意に多かった。野球選手においては利き手(投球側および打撃側)と病変の局在に有意な関係を認めた【考察】若年サッカー選手と野球選手の症候性腰椎分離症の比較から病変の局在はスポーツ種類の違いにより大きく異なることが示唆された。症候性腰椎分離症のスポーツ選手を治療する場合には競技種類および利き手または利き足を考慮した個別的治療戦略が重要であると考えられた。将来的に腰椎分離症発症予防プログラムを構築するために、本研究は重要な情報を提供すると考えることから、学位論文として適切と判断した。</p>			

最終試験結果の要旨

博士課程 甲	第 号	氏 名	横江 琢示
審 査 委 員	主 査 氏 名	黒日 嘉紀	
	副 査 氏 名	東 美菜子	
	副 査 氏 名	佐藤 裕之.	
[要 旨]			
申請論文の内容及び関連領域について発表させ、口頭で試問した結果、学位を授与するに値する学力を有するものと認定した。			